社会システム科学概論7

ライフヒストリー法
調査におけるメディア利用

ライフヒストリーとは

- 生活史　歴史学・民俗学（政治経済史中心の歴史叙述に対応する概念：範型はある）
- 個人史　自分の人生を自分でまとめたもの（個人の主観的人生理解　資料性は高い）
- ライフヒストリー（口述）　社会学
- 　調査者が被調査者と共同で構成する生きられた時間・空間における社会を描く
- 　人生を全て聞き取ることは不可能：焦点化

なぜライフヒストリーなのか

- 1　歴史　「事実」というよりも出来事に関わる認識により再構成された物語
- 　靖国神社　遊就館
- 　　1　モニュメントと記憶　戦争とは何か
- 　　2　慰霊の場　遺族にとって戦争とは
- 2　人生　「事実」というよりも生きられた時間の意味を問う
- 　高度成長期→成熟期　時間の向き、アナログからデジタルへ

口述の記録は焦点化された「事実」

- 1　聞かれなければ、思い出されなければ埋もれた記憶→質問によって喚起される：質問者の対象者に関わる理解・共感の度合い
- 2　口述の物語は変化する
- 　語りの成熟化：「語り部」の完成された語り
- 3　語られること/語られないこと
- 　沈黙させられる「事実」のおもさ（利害関係者、政治的争点があるところの語り）

参考文献

- 中野卓・櫻井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995
- 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、1996
- W・I・トマス、F・W・ズナニエツキ、桜井厚訳『**生活史の社会学**――ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房、1983
- 川又俊則『ライフヒストリー研究の基礎』創風社、2002

ライフヒストリー作成のステップ

- 1　自分の問題・テーマを明らかに
- 例　自分探しの旅－モダニティと自己意識
- 2　背景的仮説の準備
- 例　歴史・社会状況によって自己探求の方法は異なるのではないか　世代による相違
- 3　対象者の選定　調査に応じてくれる人達
- 例　まとまった時間を提供してくれる人　（戦前、戦中、戦後（団塊の世代、はざま、ポスト団塊の世代）

実際に話を聞く

- 1　質問項目をノートにまとめ、質問の流れを頭に入れておく
- 例　出生、子供・少年時代、進学、就職、結婚
- 焦点　将来なりたかったもの　人生の転機
- 2　相手の話に応じて柔軟に聞き取る
- 例　クラブの人間関係、職場の苦労話
- 3　話は可能であれば録音し、ノートに記録をとる（授業でノートをとれない人はムリ）

記録の再構成

- 1　録音を全て起こす：会話分析等
- 　エピソードの語り口、流れのみ起こす：ライフヒストリー法はこれで十分
- 2　口述の語りをもとに、テーマに関わるまとめを行う
- 例　単独よりは複数の人の語りを併せた方が類型化・焦点化のポイントがつかみやすい

調査におけるメディア利用

- 1　デジタル・カメラ　風景・文字記録
- 2　ビデオ・カメラ　暗がりに強い・音声同時
- 3　ICレコーダー　音の拾い方に差異あり
- 4　ノート　雑記帳　記憶の補完

- 5　調査後、数日以内に記録をまとめる
- 6　マルチ・メディア　技量・経験が必要　プレゼンテーションには威力を発揮